様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２３７０

研究課題名（和文）芸術資源デジタルアーカイブの創造的活用のためのコミュニティーとエコシステムの形成

研究課題名（英文）Creating digital archival ecosystem of arts and cultural resources

研究代表者
石原　友明（Ishihara, Tomoaki）

京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・教授

研究者番号：６０３１５９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：デジタルアーカイブの創造的活用を通して、地域の記憶を継承できるコミニュティーとエコシステムを形成するための実践知の獲得が本研究の課題である。
コンピューターを用いた建築計画や京都のAIDSアクティヴィズムの資料に関するデジタルアーカイブの実践と公開を行った。それらを通して、単なる資料体の蓄積・管理を超えて、記憶の再演やマイグレーションが促進され、新たな地域コミュニティーの醸成につながるオープンデータの活用と、アーカイブ作業を通した共有空間の道筋が開かれた。
それによって、既存のアーカイブ機関での集中管理ではなく、将来的な分散型のアーカイブの可能性が展望される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の建築史を踏まえ、３D、AIなど最新技術を駆使した未踏のアーカイブ実践を行うとともに、これまでの美術史やメデアアートの歴史で見過ごされてきた過去の歴史を再認識するためのアート・アクティビズムに関するアーカイブの実践が実現した。ウェブサイト、美術館、大学ギャラリーでの公開につながり、論文や出版物で概要を公表した。建築史やメディアアート史をこれまでとは異なる形で構成するための豊富な資料の公開につながった。それらの事例研究を重ねるとともに、今後のデジタルアーカイブの創造的な活用について芸術大学間での体制と連携を強化するとともに、芸術研究を超えたインパクトを与えた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to acquire practical knowledge of forming community and ecosystem in order to inhere regional memories through the processes of creative digital archiving.
Various materials in digital computing of architecture and the historical and archival research of AIDS art activism in Kyoto were archived and digitized, and made public in several exhibitions. Through these practices, not only the unknown archives are stored and managed, but they facilitate the re-enactment of memories and migrate from one place to another. So the usages of open data to develop regional community and the path to shared space were opened.
Therefore the future perspective of the sustainable archives are de-centralized ones rather than centralized institution.

研究分野：芸術一般

キーワード：デジタルアーカイブ　アート・アクティビズム　コンピューティング・デザイン　タイムベースト・メディア　オープンデータ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

芸資研では、平成 27 年度、平成 28 年度にタイムベースト・メディア作品の修復・保存・記録についての研究を行ったが、タイムベースト・メディア作品の修復・保存について先駆的な活動を行っている英国の TATE 美術館、カールスルーエの ZKM、さらに《LOVERS》のオリジナル・バージョンを収蔵しているニューヨーク近代美術館 MoMA の取り組みを調査するなかで、タイムベースト・メディア作品の修復・保存が、デジタルアーカイブを管理する情報システムの再構築と切り離せないものであることを認識した。メディア作品のデジタル保存の課題は、それに対応した新たなアーカイブの活用法やそのテストと切り離すことができない。実際のところ、MoMA も含めて、いままさに世界の各施設が、蓄積から一歩進んだ共有や公開、教育利用を目指した次の方向を模索している段階である。
変化や取り換えの早い情報技術のサイクルのなかで、サステナブルなシステムが構築できるかどうかは、学会の専門的な共同体を超えて、芸術資源の継承や創造的活用を推進するための新たな人材の育成も含めたエコシステムを構築することが欠かせない。芸術資源の保存・修復に関わる研究者やアーティスト、美術館の学芸員やアーカイビストをはじめとして、ユーザビリティを向上するためにインターフェースを設計するデザイナー、物理的な収蔵スペースを設計する建築家、地域資源を残すためにアーカイブの活用に参画する市民ユーザーなどの参加と連携が不可欠である。
本研究では、芸資研のプロジェクトのなかで既にデジタル化を進めており、研究を積み重ねてきた芸術資源を基盤に、それらを活用できるアーカイブの将来像について研究と実践を行える場を構築する。当面は芸術資源を、個々のプロジェクトに応じて分散型に管理することを想定しつつも、各々の統合のための議論やテストを行う。そこからデジタル技術を利用した将来的な芸術資源の保存と管理とその活用のための人材育成が可能なサステナブルなエコシステムの基礎固めを行う。

２．研究の目的

アーカイブ事業は構築と維持のために、ともすると膨大な予算と作業量が要求されがちである。本研究では、将来的な課題を見据えながらも、ストレージを拡張するよりも、芸術関係者を中心にユーザーや開発者のネットワークの形成やリテラシーの向上という人的ネットワーク構築を目指すための実験的な研究を行う。
京都市立芸術大学芸術資源研究センターに関わるメンバーを核にしながら、内外の専門家とネットワークを築くことで、将来的なデジタルアーカイブの課題と問題点を明らかにする。公開研究会やワークショップなどを通してデジタルアーカイブを利用するユーザーのリテラシー向上を図る。プロジェクトを進めていくなかでデジタルアーカイブのコンテンツを編纂する実践を通して、今後の課題と新たな創造的活用への方法を模索する。展示や研究会を通して成果公開を定期的に行い、ユーザー、開発者からのフィードバックを得ながら、システムの改善や開発の指針を定め、コミュニティーとエコシステムを形成する。

３．研究の方法

研究代表者と共同分担者は主に次の課題について、デジタルアーカイブについての個々の具体的な実践を通して、調査を進めた。
共同研究者の石原友明（代表）は、アーティスト、京都市立芸術大学芸術資源研究センター所長としてプロジェクト全体の統括を行い、芸術資源研究センター内のデジタル化のための撮影機材の整備やノウハウの共有に努めた。また中之島美術館準備室や多摩美術大学アーカイブ研究センターなど他のアーカイブ機関との連携を促進し、日本のアーカイブ機関の取り組みと課題を探った。そうしたなかで、以下の４つの課題について研究を進めていった。

① <u>デジタルアーカイブの現状と課題の調査</u>
② <u>芸術資源のデジタル化とその実践的活用</u>
③ <u>地域資源のデジタルアーカイブの実践研究</u>
④ <u>デジタル・アート・アーカイブ・システムの開発に取り組むオープンソース・コミュニティーの形成</u>

① デジタルアーカイブの現状と課題については、国内のアーカイブ機関との連携を深めながら、デジタルアーカイブの活用の歴史の検証と海外の実地調査を行う。研究分担者の砂山太一（京都市立芸術大学美術学部講師）は、1990 年代からのコンピューテーショナル・デザインと建築手法の変化の歴史的考察を通して、AI や３D スキャンなどの最新技術を駆使したアーカイブ手法の開発や実践につなげる。研究分担者の石谷治寛（芸術資源研究センター非常勤

研究員）は、芸術学の観点からのデジタルアーカイブやアーカイブ実践の歴史と現状調査を行い、京都で展開した芸術活動の資料調査と展示につなげる。また、タイムベースト・メディア芸術の保存・修復の国際的な動向を踏まえたうえで、その基盤となるオープンソースのデジタル・アーカイブ・システムの調査を行い、アーティスト個人や小規模のコミュニティーが導入できるアーカイブ・システムの将来的なあり方を模索する。

② 芸術資源のデジタル化とその実践的活用については、芸術にまつわる資料のデジタルアーカイブの構築作業を進めるなかで、デジタル化を進めていくノウハウを蓄積する。それぞれの研究分担者が異なるプロジェクトを並行して進めていきながら、ノウハウを共有する。障害者施設みずのきの絵画教室で制作されたコレクションのデジタル化とアーカイブ構築を共同で行う。砂山は、デジタルアーカイブ活用のための建築家やアーティスト・コミュニティーとの連携を深め、AI や３D スキャンなど最新技術を駆使したアーカイブ手法の開発や実践を行う。石谷は、1990 年代のエイズ危機に応答して京都で展開したアート・アクティビズムについての調査を進める。これらのデジタル化の作業には、学生や卒業生の参加を積極的に促しながら進めていく。それらを通して、アーカイブの意義や方法を幅広い世代で認識し、「アーカイブ文化」を醸成する。

③ 地域資源のデジタルアーカイブの実践研究では、デジタルアーカイブの活用を研究者がファシリテートする事を通して、地域のアーカイブを保管して公開する意義を、専門家を超えたコミュニティーが理解し、さらなる実践が促されるようなエコシステムにつなげていく。砂山は、アーティストのコミュニティーとの連携を深めることを通して実践を進める。石谷は、上記のエイズ・アクティビズムに関連する資料を掘り起こしながら、当事者へのインタビューを重ねることで、さらなる資料の掘り起こしにつながるような取り組みを行い、資料展示を通した公開と共有を行う。

④ 近年デジタルアーカイブの管理ソフトウェアがオープンソースで開発が進められている。それらをサーバーとして運用し、イントラネット経由でアクセスできる PC や NAS（Network Access Server）を使って管理・閲覧できるようにする。そのためのノウハウを情報技術者と共有しながら、今後のデジタルアーカイブ管理の方法を模索する。

本研究課題と並行して、他の外部資金として、文化庁アーカイブ推進事業の研究助成で「ダムタイプ《pH》のシミュレーター制作と関連資料アーカイブ」（2017-2018 年度）が採択された。これは、過去のメディア・アートの保存・修復、パフォーマンス・アートの再演など、美術作品アーカイブの課題について明らかにすることにあった。本研究課題では、研究成果の公開のためのデータベースのインターフェース・デザインを外部委託して共同開発することで、デジタルアーカイブのシステムの課題を明らかにする。

４．研究成果

研究成果に関しては、まずそれぞれの研究者の成果を概略したうえで、３であげた４つの研究の方法に即してどのような成果が得られたか概説する。さらに、そこで明らかになった課題と今後の展望について述べる。

研究代表者の石原友明は、アーカイブに関するシンポジウムなどを通じて、国立国際美術館、中之島美術館、兵庫県立美術館、尼崎市総合文化センターなど芸術アーカイブ機関との連携を進めた。

- 妹尾綾・松山ひとみ・石原友明・齋藤歩（2018）シンポジウム「美術資料アーカイブの現在 ― 美術家を知る手がかりとして ―」尼崎市総合文化センター

研究分担者の砂山太一はメディアアーティストとして、VR による建築空間の３D 再現、機械学習、３D スキャンなどの最新技術を使った実験的なアーカイブ活動に携わった。

- 株式会社新建築社との共同プロジェクト「建築知 / index architecture」：1925年創刊の雑誌『新建築』のデジタルデータベース構築と、デジタルデータから人工知能技術をもちいて機械学習することによって得られる新たな知の継承と発見のシステムに関する研究をおこなう。
- 第１７回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示「エレメントの軌跡」デジタルデータベース構築：2020年に開催されるヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示において、日本の戦後住宅一棟を解体し一つ一つの部材の来歴や形状の３Dスキャンなどをおこないデジタルデータベースを構築することによって、住宅一つの中に埋め込まれた日本の戦後産業史を洗い出す取り組み。

研究分担者の石谷治寛は、現代美術における歴史的・個人的トラウマの記録・再演・治療に関わる芸術実践をアーカイブという観点で発展させた。1990 年代京都に展開したアート活動の映像や写真資料のデジタル化やエフェメラ整理を行い、その成果展示を森美術館および京都精華大

学ギャラリーフロールで共同企画した。2018 年には森美術館において共同企画で資料展を行い、翌年 6 月にその記録集を発刊した。さらに、2019 年度の 6 月から 7 月にかけては京都精華大学ギャラリーフロールで「ヒューマンライツ＆リブ博物館　アートスケープ資料が語るハストリーズ」と題された展示企画をディレクションした。その研究実践に関する論考を、京都市立芸術大学芸術資源研究センター紀要「COMPOST」にて発表している。

- 椿玲子・石谷治寛（2018）「MAMリサーチ006：クロニクル京都–ダイアモンズ・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る」 森美術館
- 石谷治寛・山田創平（監修）（2019）「ヒューマンライツ＆リブ博物館–アートスケープ資料が語るハストリーズ」ディレクション」 京都精華大学ギャラリーフロール
- 石谷治寛「AIDS危機の時代のクラブカルチャーと芸術実践のアーカイブ—視点・過程・展示」芸術資源研究センター紀要COMPOSTO１，2020年3月，pp．10-40

以下では上記の研究成果が、本研究の４つの課題に対してどのような成果が得られたか述べる。

① デジタルアーカイブの現状と課題の調査

研究代表者の石原友明は、アーカイブに関するシンポジウムなどを通じて、国立国際美術館、中之島美術館、兵庫県立美術館、尼崎市総合文化センター、多摩美術大学アートアーカイブセンターなど国内の美術館・芸術アーカイブ機関との連携を進めてきた。そこでアーカイブ機関へと大量にデータを集約していく仕組みの限界が浮かびあがった。こうした従来型の組織だと、ある特権的な美術家の試みを中心とした歴史記述しか行えない。より小さな組織や個人が蓄積した資料を相互にシェアしつつも、その正統性が保証される仕組みとして分散型ネットワークを促進するブロックチェーン技術が注目される。そうした集中型アーカイブから分散型アーカイブへの進展が、将来的な課題としてある。
芸術資料の活用は、近年の国外の美術館のコレクション展示において顕著に見られる。とりわけポンピドゥー・センターのコレクション展では、美術運動ごとに分けられた展示室にあわせて、同時代の批評家のテクストやギャラリーの活動などが資料台に置かれる。あるいはローマ現代美術館では、「音がかたちになる時」と題して、1960 年代以降の実験音楽と結びついた視覚芸術の展開を、デジタル化された写真、映像、音源を断片的に配置して展示した。このように作品ではないアーカイブ資料が、美術館の展示で活用される機会は増加している。
こうした美術資料の展示公開の動きは、インターネット上でのデジタルアーカイブの活用とも切り離せない。ニューヨーク MoMA やホイットニー美術館は、ウェブサイトで個々の作家や展覧会写真、刊行物を串刺し検索できるシステムが構築されている。このように物理的な展示からインターネット上でのデジタルなプレゼンテーションまでもが、統合されることで、美術展示ないし美術情報にアクセスするあり方が大きく変化している。
さらにヨーロッパで 2 年に 1 回異なる都市で行われるマニフェスタ 12（シチリアで開催）では、国際的に移民や植物が移動・移植（マイグレーション）して多層的なモザイクを形成してきた都市の歴史とエコロジーを既存の建築物や植物園を通して浮かび上がらせるとともに、米軍による通信衛星の基地がシチリアで構築されるとともに、それに対する反対運動の高まりを通して、グルーバルな情報通信やデジタル化の条件を問い直す試みであった。アーカイブは、静的なオブジェというより、そうした地域の歴史の痕跡を通して、身体的に生き直される契機として捉えられている。つまり、単なる資料収集や保存を超えて、論争を通して地域住民が新たな行動を促すためのツールとみなされる。デジタル化の現在を批判的に考察しながら、マイグレーションを通して、地域の記憶を未知の実践にアップデートする試みは岡山芸術交流にもみられ、アーカイバルな実践の今後の課題である。

② <u>芸術資源のデジタル化とその実践的活用</u>
2010 年代までの建築がコンピューテーショナル・デザインの展開によって、建築の各々の要素のパラメーターを操作することによって新たな設計計画が進められてきたが、情報がクラウドに溜められ始め、実験的な建築から、社会実装の課題が顕著にみられるようになった。例えば、フォレンジック・アーキテクチャーや台湾のデジタル省で活躍するオードリー・タンなどの例がある。砂山はそうした歴史を踏まえたうえで、アーティストやキュレーターと協働で、オープンデータの芸術の応用可能性やシビックテックの課題を考察する。つまり行政が発信しているオープンなデータをわかりやすく可視化する試みが広がっている。その時すでに作られつつあるデータベースにアーティストがいかに介入するかが新たな課題となる。
砂山はウェブ・アーキテクチャーのデザイナーとして、雑誌『新建築』のデータを機械学習や深層学習などを用いて、データをソートする検索システムを設計した。それによって、いわゆる名建築だけでなく、これまで検索に引っかかりにくい、地味な建築にも注目できるようになる。む

しろそうした建築物にこそ建築のエッセンスがあるだろう。
砂山は、2020 年に予定されていたヴェネチア ・ビエンナーレ（2021 年に延期）の共同参加者のひとりとして、ありふれた住宅を構成している部材をバラして、部品化して、3D データを生成させてデジタルデータベースを構築する共同実践に携わっている。部材を通して、産業技術の歴史のアーカイブが浮かび上がる。
さらには、YCAM による「搬入プロジェクト」のアドバイザーとして協力もしている。これは劇団悪魔のしるしが、巨大で非合理なかたちに組み上げられたブロック状の構築物を、既存の施設に搬入する作業を参加者とともに行うイベントである。YCAM はこれをパブリック・ドメントして公開し、その共同実践が作品のアーカイブ化の意義を問い直すものでもある。この共同作業を通して、参加者は、建築物が作り出す空間性を日常とは異なる身体をもって記憶し直す。こうした試みも、アーカイブは、再演を通した、マイグレーション（移行）の実践となる。

③ <u>地域資源のデジタルアーカイブの実践研究</u>

石谷は、AIDS 危機の時代の芸術実践を、現代のアーカイブ実践の課題の重要な転換期と見なし、その時アーカイブが地域でのアート活動の重要な要素として実践されたことに注目した。それにともない、京都の地域で展開したアート・アクティビズムの資料や映像のデジタル化、聞き取りを行い、デジタルアーカイブ構築を模索しながら進めた。このアーカイブ実践は、幸運にも森美術館や京都精華大学での資料展につながり、公開の機会を得ることができた。我が国では、性的マイノリティの文化資料のアーカイブや作品とはみなされないものの美術家たちも含めた種々の実践は、美術館や図書館や公的アーカイブからも見放されてきたといえる。そうした美術資料とも地域資源ともみなされる素材を通して、見過ごされるようになりつつある過去を掘り起こすとともに、アーカイブのもつポテンシャルと、当事者や個々の市民が協働でつくりあげる意義について問題提起を行うことができた。こうしたアーカイブ実践は、作品として安定化させる修復保存とは異なり、絶えず枠組みが修正されながら、アーカイブの意味の生成や論争に参加できる一時的な創造的な共有空間として実践されることで、未知の観客を巻き込んだかたちで継承されるだろう。
こうした地域のアート・アクティビズムのアーカイブ化は、地域のパフォーマンスや演劇の歴史にもつながっている。これらの知見をきっかけとして、京都の小劇場の歴史を引き継ぎ、新設された劇場シアターE9 との連携に結実した。劇場の公演記録や作品資料のアーカイブを構築するための方法の共有を進める予備リサーチへと発展している。

④ <u>デジタル・アート・アーカイブ・システムの開発に取り組むオープンソース・コミュニティーの形成</u>

上記の具体的なデジタルアーカイブの研究や京都市立芸術大学学内の他のアーカイブ作業など、多くの実践が並行して進められている。それらのデータを管理・保存して、横断的に検索するための適切なソフトウェアやシステムが将来的に形成される必要がある。オープンソースを使ったアーカイブ管理システムの導入は合理的で統合的なアーカイブ構築には重要である。本研究では、AtoM(Access to Memory)や OMEKA といったオープンソース・ソフトウェアを仮想サーバーにインストールして検証するとともに、インターフェース・デザイナーへの外部委託を通して、ユーザーにとっても扱いやすいデータベースの構築を進めた。そうした検証から特に重要な課題としてあがったのが、データの移行（マイグレーション）可能性という課題である。
現在のアーカイブをめぐる試行錯誤では、マルチメディアのデジタルデータを扱う傾向が強まっている。それぞれの調査対象の資料体の構造や物理的に管理されてきた仕方によって、フォンドの構造や、アーカイブ記述の方法は、個性的で、それぞれ異なるものとならざるを得ない。その時、単なる資料の保管を超えた、共有や創造的な活用や新しい実践の促進のためには、既存のアーカイブ管理システムにデータセットを登録するだけでは不十分である。アーカイブ情報の、最小単位としてメタデータとデジタルファイルのセットが CSV などで管理されるが、原データはその状態に留めておいた方が良いと結論できる。むしろそのデータセットを様々なアーカイブ管理システムにマイグレーションをするノウハウを構築することの重要性が結論できる。アーカイブ管理システム自体は不具合を抱え、常にバージョンアップされるとは限らないし、その管理コストが見合わなくなるような、別のシステムへとアップデートされることが頻繁におきていく。データセットは固定したホスティングサービスに留まるよりも、常に宿主（ホスト）を変えながら、変化する流動的なものだと捉えるべきである。将来的なマイグレーション可能性を担保できるコミュニティーとエコシステムの生成と継承が、創造的なアーカイブの活用にとって不可欠な条件となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 石谷治寛	４．巻 第一巻
２．論文標題 AIDS危機の時代のクラブカルチャーと芸術実践のアーカイブ――視点・過程・展示	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都市立芸術大学紀要COMPOST	６．最初と最後の頁 2-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤知久・石谷治寛・砂山太一・村上花織(neco)・ 小松千倫・桐月沙樹	４．巻 27
２．論文標題 再演/創造のためのアーカイブ：3D/VRシミュレーターとデジタル・アーカイブによるダムタイプ《pH》	５．発行年 2020年
３．雑誌名 慶應義塾大学アートセンターbooklet 27	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 砂山太一	４．巻 201902
２．論文標題 「辺獄の際――ジェームズ・ブライドル著『ニュー・ダーク・エイジ：テクノロジーと未来についての10の考察』書評」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 建築討論 建築書評	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 砂山太一	４．巻 201810
２．論文標題 伸び縮みする世界で――中山英之著『1/1000000000』書評	５．発行年 2018年
３．雑誌名 建築討論 建築書評	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 砂山太一	4．巻 201806
2．論文標題 「かつて」と「いま」が結びつく「ここ」にある知性――石岡良治、三浦哲哉編著『オーバー・ザ・シネマ 映画「超」討議』書評	5．発行年 2018年
3．雑誌名 建築討論 建築書評	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 砂山太一	4．巻 201804
2．論文標題 「20世紀の遺産から考える装飾」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 10+1　特集 装飾と物のオーダー ポストデジタル時代の変容	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 畠中実、金子智太郎、石谷治寛	4．巻 201903
2．論文標題 メディアから考えるアートの残し方――展示、再演、再制作	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アートスケープ	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石岡良治，砂山太一	4．巻 201804
2．論文標題 20世紀の遺産から考える装飾	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『10+1 201804 特集 装飾と物のオーダー ポストデジタル時代の変容』	6．最初と最後の頁 ウェブ掲載
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 砂山太一	4．巻 2017年8月号
2．論文標題 ツールと人間　欲望する情況――小林健太個展「自動車昆虫論／美とはなにか」展評	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『美術手帖 17年8月号』	6．最初と最後の頁 171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 砂山太一	4．巻 201705
2．論文標題 デジタルファブリケーションを有効化するための５か条	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『10+1 201705 特集 ファブリケーションの前後左右――ネットワーク時代の生産論』	6．最初と最後の頁 ウェブ掲載
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石谷治寛	4．巻 第９巻
2．論文標題 歴史と踊る―再演の想像力をめぐる三つのケース	5．発行年 2018年
3．雑誌名 情報科学芸術大学院大学紀要	6．最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石谷治寛	4．巻 第９巻
2．論文標題 《pH》再演のためのアーカイブ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 情報科学芸術大学院大学紀要	6．最初と最後の頁 75－83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　13件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 石原友明
2．発表標題 アーカイブと作品写真－製作者の立場／記録者の立場
3．学会等名 美術資料アーカイブの現在（尼崎市文化振興財団）（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石原友明
2．発表標題 個展「三十四光年」
3．学会等名 MEM（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石原友明
2．発表標題 「起点としての80年代」展
3．学会等名 金沢21世紀美術館、高松市美術館、静岡市立美術館（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石原友明
2．発表標題 「ニュー・ウェイブ　現代美術の80年代」展
3．学会等名 国立国際美術館（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 石原友明
２．発表標題 「リズム、反響、ノイズ」展
３．学会等名 横浜美術館（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石原友明
２．発表標題 「見えないもののイメージ」展
３．学会等名 国立国際美術館（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石原友明、遠藤水城、白石晃一、高嶋慈、田口かおり、加冶屋健司、中井康之、相澤邦彦、小林公、飯尾由貴子
２．発表標題 シンポジウム「過去の現在の未来２ーキュレーションとコンサベーションその原理と倫理」
３．学会等名 兵庫県立美術館
４．発表年 2017年

１．発表者名 山田創平、森村泰昌、上田假奈代、石原友明、佐藤知久、木ノ下智恵子
２．発表標題 下町芸術祭　シンポジウム　「そもそも下町ってなんやろか」
３．学会等名 ArtTheater dB KOBE（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石原友明、鈴木康広、広瀬浩二郎
２．発表標題 「見えない人と見える人の作品鑑賞について」
３．学会等名 京都国立近代美術館（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川勝真一，寺井翔茉，砂山太一
２．発表標題 「切断なき世界における人間〈と〉デザイン」『デザイニング・ヒューマニティ / Designing Humanity』
３．学会等名 『デザイニング・ヒューマニティ / Designing Humanity』（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 エキソニモ，砂山太一，水野勝仁
２．発表標題 ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて　ギャラリートーク
３．学会等名 水戸芸術館（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石谷治寛、三輪健仁、赤羽亨
２．発表標題 「再演、再制作、再展示」
３．学会等名 シンポジウム　おおがきビエンナーレ2017　新しい時代　メディア・アート研究事始め（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松隈洋、渡部葉子、石谷治寛
２．発表標題 資料の読み書きと教育
３．学会等名 シンポジウムおおがきビエンナーレ2017　新しい時代　メディア・アート研究事始め（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 ブブ・ド・ラ・マドレーヌ,石谷治寛
２．発表標題 たたかう、アート！Vol.3 『第五回講座｜エイズ危機の時代のアートとそのアーカイブ化―これまでの経緯と課題』
３．学会等名 Cafe LGBT+, 京都市立芸術大学芸術資源研究センター（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計6件

１．著者名 椿玲子、石谷治寛	４．発行年 2019年
２．出版社 森美術館	５．総ページ数 98頁
３．書名 クロニクル京都1990s―ダイアモンズ・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る	

１．著者名 石原友明ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 栃木県立美術館	５．総ページ数 pp. 45-46(95)
３．書名 2Dプリンターズー芸術：世界の承認をめぐる闘争について	

１．著者名 Yuko Hasegawa, Serge Lasvignes, Emma Lavigne, Tomoaki Ishiharaほか	４．発行年 2017年
２．出版社 国際交流基金、Centre Pompidou-Metz	５．総ページ数 50，184(247)
３．書名 Japanorama－1970年以降の新しい日本のアート	

１．著者名 高木こずえ、澤田育久、水木塁、小松浩子、石原友明、柄澤健介、野村在	４．発行年 2017年
２．出版社 武蔵野美術大学	５．総ページ数 73-82，132-140(168)
３．書名 鍵と穴－彫刻と写真の界面	

１．著者名 砂山太一，谷口暁彦	４．発行年 2017年
２．出版社 エウレカ・プロジェクト	５．総ページ数 pp．17-30(82)
３．書名 「おまじないの運用」，『E!11』	

１．著者名 水野勝仁，砂山太一，山峰潤也	４．発行年 2018年
２．出版社 水戸芸術館	５．総ページ数 pp72-77(96)
３．書名 ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて　展覧会カタログ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

京都市立芸術大学芸術資源研究センターニューズレター５号
http://www.kcua.ac.jp/arc/wp/wp-content/uploads/2019/04/ca306c61a887754fa9d1ef7dd71144d2.pdf
京都市立芸術大学芸術資源研究センター
http://www.kcua.ac.jp/arc/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	砂山　太一 (Sunayama Taichi) (50750460)	京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・講師 (24301)	
研究分担者	石谷　治寛 (Ishitani Haruhiro) (70411311)	京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・非常勤講師 (24301)	